語りあうページ

9年前のシンポから

「苦痛の軽減」定義なく迷い

肉体・精神の苦痛のサイン

動物たちも送っている

討議の冒頭に慶応大学医学部の前島一淑教授があいさつをした。動物実験の必要を認めながらも、動物福祉に深い関心を寄せる誠実な学者らしい苦渋がうかがわれる。

「動物実験反対運動には、人の健康のためといえども動物を研究に利用してはならないとする主張もあるが、本会の会員のなかにそれに賛成する人は少ないと考え、本日のシンポジウムでは動物実験の可否についての議論を省略する。しかし、動物実験に対する批判には研究者が反省すべきところがあるのも事実だ。今回は実験動物の苦痛に焦点を絞って討議する。苦痛をテーマにした理由は『実験動物の飼養及び保管等に関する基準』が実験動物における苦痛の軽減、排除をうたっているにもかかわらず、その苦痛の定義がなく、研究者はこの基準の対応に迷っているためである。

このシンポジウムの特色は、心理学、薬理学、麻酔学の研究者による動物の苦痛の講演に先立ち、国語の専門家、臨床獣医師、動物福祉活動家の立場による動物の苦痛の説明があることである。

討議は「いったい人間は動物の苦痛を察知できるのかどうか」が中心になった。

日本動物福祉協会の山口千津子さんは「動物はサインで苦痛を表現できる」とつぎのように述べた。

「苦痛とは本来それを受けた人や動物における主観的なもの。人の言葉を話さない動物の苦痛を客観的に評価することはむつかしい。しかし、愛情を持った者による動物の生理学的所見や姿勢、態度、行動、表情などのくわしい観察からその苦痛を判断することは可能だと私は思う。

例えば、呼吸、脈拍が速くなる、瞳孔（どうこう）が開く、身体の一部をかばう独特の姿勢、うずくまる、さまざまな鳴き方など。人が言葉で表現しているのと同じような肉体的痛み、精神的苦しみが動物にも存在すると私たちは考える」

さらに山口さんは、狭く不備なケージに閉じ込められた実験動物のさまざまなシーンを写真で説明した。

ケージが小さすぎてゆっくり足を伸ばして横になれない大型犬。床が細い金属棒のため、犬の指の間に棒が入り込み、不安定な姿勢をしいられる犬。指の間はやがて炎症を起こすだろう。低いケージで中腰にさえなれない猿。肉体的にも精神的にも異常を示すに違いない。

「人間が自分たちの利益のために、動物が望んだわけでもない苦痛を動物に与え、ときにはその命を奪うのであるから、できるだけ苦痛を軽く」

「手段選ばず後に悔いた」

若いころの本音語る

国立国語研究所の野元菊雄さんは「苦痛は動物に限らず、人の場合も概念的、抽象的で、（人の言葉を使っても）純客観的に決めることはできない」とし、次のように説いた。

「その意味で、動物における苦痛の存在も分からない。動物福祉運動は感情移入という一般社会から出てきたためである。つまり研究者は今後、一般の人々に通じる言葉で動物に苦痛を与えない実験を意図していることを社会に示さなければならない」

それは実験動物に対する批判が生物学、医学の視点から提出されたものではなくて、し、苦痛を受ける動物の数を減らすことは人間の務めだ。また、苦痛で異常になっている動物を用いた実験から良質の情報が得られるはずがないので、こうした倫理的な配慮は科学的な目的にもかなっている」と結論づけた。

これに対し、実験動物中央研究所の安東潔さんは「動物の苦痛の問題は科学と倫理の二つの側面が交差して複雑になる」と、次の要旨を説いた。

「動物にも人間の痛覚に相当する内部感覚が存在する。だからといって、安易に動物の内部感覚を人間の内部感覚の表現語である苦しみ、痛み、悲しみなどに移し替えたり、人の世界のイメージを投影することは科学的にみると客観性を欠く。むろん、私たちには動物を慈しむという人間が本来持っている感情があり、これを大切にすることは重要である。動物実験の大部分は明確な目的を持って遂行され、人に役立っているし、積極的に動物を残酷に扱おうとしている研究者はいない。しかし、第三者の目で見たときに残酷と映ることがあるのも事実だ。科学の領域の外にいる人々の批判を無視することは適切でなく、実験者とそうでない人々とのコミュニケーションは大切と思われる」

安東さんはこのあとの総合討論で「ただ（動物に苦痛はあるかないかと問われれば）科学的な意味では動物に苦痛はないと答えざるをえない。苦痛とはあくまで人の内部感覚を言語で表現したものである。擬人的な表現を使って動物の苦痛を表現することは科学研究を進めていくうえで非常に障害となる」と発言。

これには岐阜大学農学部の大橋秀法教授が「現段階では科学的に実証できないが、一般の人々が考えている苦痛が動物にもあると私は考えている。もし、それが科学的に人の苦痛と違うというのであれば、別の用語を作ってもらいたい」と迫り、安東さんは「人の感情や精神的内容を表現する言葉を、安易に動物にあてはめて使うことに問題があるといっているだけだ」と説明する一幕があった。

ほうが現実的ではなかろうか」

麻酔学者からは「基本的には動物も人も同じ苦痛のメカニズムを持っているから麻酔の実験の意味がある」という趣旨の発言があった。

このほか、学者Aさんは若いころのホンネとして、①実験動物を必要なときに必要な数だけ、できるだけ安くわずらわしい手続きなしに入手したい②実験の準備や手続きはできるだけ省略したい。動物が痛くてもかまわない③実験が残酷と感じてもそのうち慣れるので、他の実験方法を工

の言い分

捨てない
理」の
では

——。わが国の研究取り上げたのは9年が最初である。日本こたえ、適正な実験獣医師、動物福祉活ジウムの討議を中心側の言い分を追って員・橋爪　竹一郎）

入されたネことができA」提供